

《資料紹介》 本多甲斐守京邸出土の動物遺存体

丸山真史

(京都大学大学院 人間・環境学研究科)

富岡直人

(岡山理科大学 総合情報学部)

平尾政幸

はじめに

2002年から2003年にかけて当研究所が実施した中京区蛸薬師通油小路東入る元本能寺南町に所在する本能小学校跡地の調査により検出した江戸時代前期の土壌から多量の動物遺存体が出土した。調査地は現蛸薬師通・油小路通・小川通に囲まれた区域で、平安京では左京四条二坊十四町の西北四分の一町に該当するが、『寛永十四年洛中絵図』（以下『洛中絵図』）には十四町中央部に江戸時代の大家本多甲斐守の京邸が記されている。

多量の動物遺存体が出土した土壌SK2053は、その検出位置や出土土器類の年代からみてこの本多甲斐守京邸のゴミ廃棄土壌と推測される。

出土した動物遺存体の同定は、北野信彦、富岡直人、丸山真史が行い、計測にはくらしき作陽大学の学生諸氏の協力を得た。本稿ではまず遺跡および土壌SK2053の概略と動物遺存体以外の出土遺物の概略を記し、その後に土壌SK2053出土の動物遺存体について述べる。

なお本稿の執筆は1および2を平尾が、3以降を丸山と富岡が分担した。

1. 遺跡の概略

冒頭で触れたように当地は平安京左京四条二坊十四町の西北四分の一町に該当し、『仁和寺所蔵古図』によれば平安時代中期には十四町に縫殿守藤原為兼の邸宅や大和国竹林寺に関わる土地があったと記されている。当地北側の十五町は、現在寺町通り御池に所在する本能寺の旧地にあたるが、森幸安の『中昔京師図』には「本能寺地」として今回の調査地である十四町を含めた南北2町の範囲が指定されており、その寺地の一部である可能性もあった。また既に述べたとおり『洛中絵図』には周囲の道路に沿って並ぶ町家に囲まれた十四町中央部に、江戸時代の大家本多甲斐守の京邸があったことが記されている。

調査の結果、平安時代の四条坊門小路の南側溝および路面をはじめとして近代までにわたる4500を超える遺構や多量の遺物を検出した。遺構の種類も多岐にわたるが、特に各期の井戸跡を76基検出し、平安時代以来当地において継続的に生活が営まれていたことが確認できた。さらに、

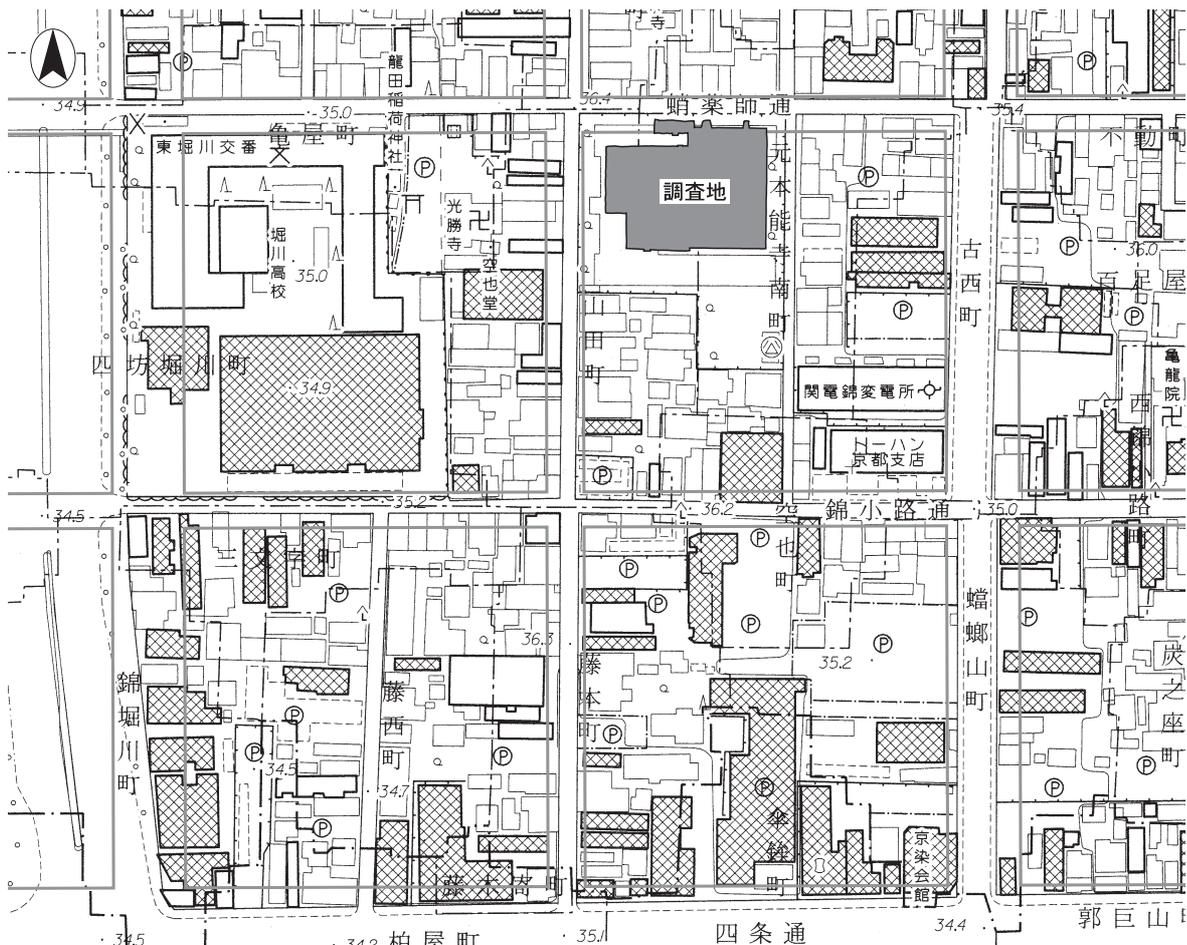


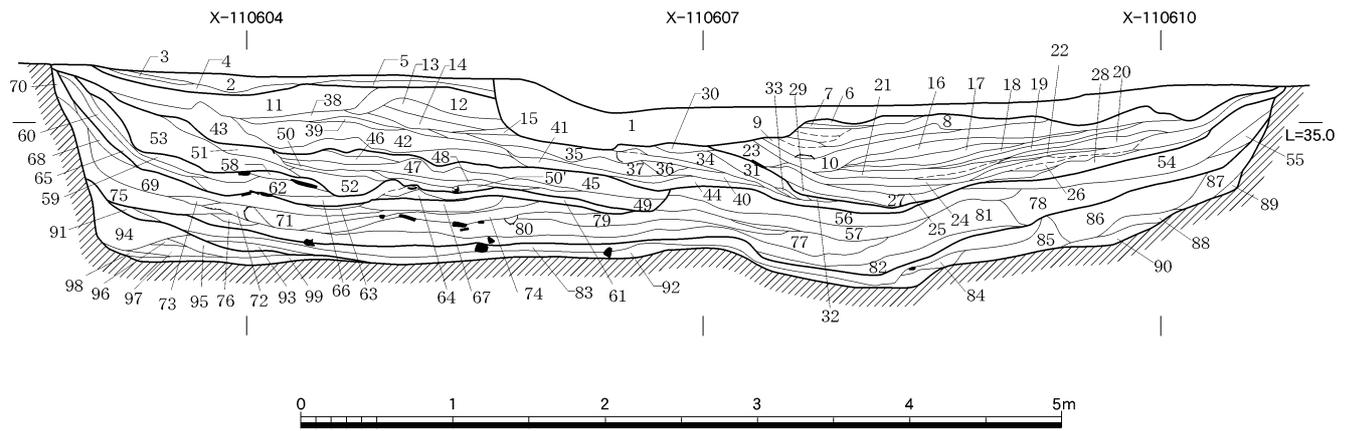
図1 遺跡の位置

下京惣構の濠を検出した結果、当地が下京惣構内の西側北端部に当たることが判明し、『洛中洛外図』（上杉本）との検討から、本能寺の位置に関して重要な情報が得られた。また今回述べる江戸時代前期の土壌SK2053はその位置関係から本多甲斐守京邸敷地の北西隅に設けられたゴミ廃棄土壌と推定され、出土した土器・陶磁器・木製品・金属製品・食物残渣などの多種多量の遺物は、当時の武家屋敷に於ける生活の一端を考察するにあたっての好資料といえよう。

2. 遺構の概略と位置

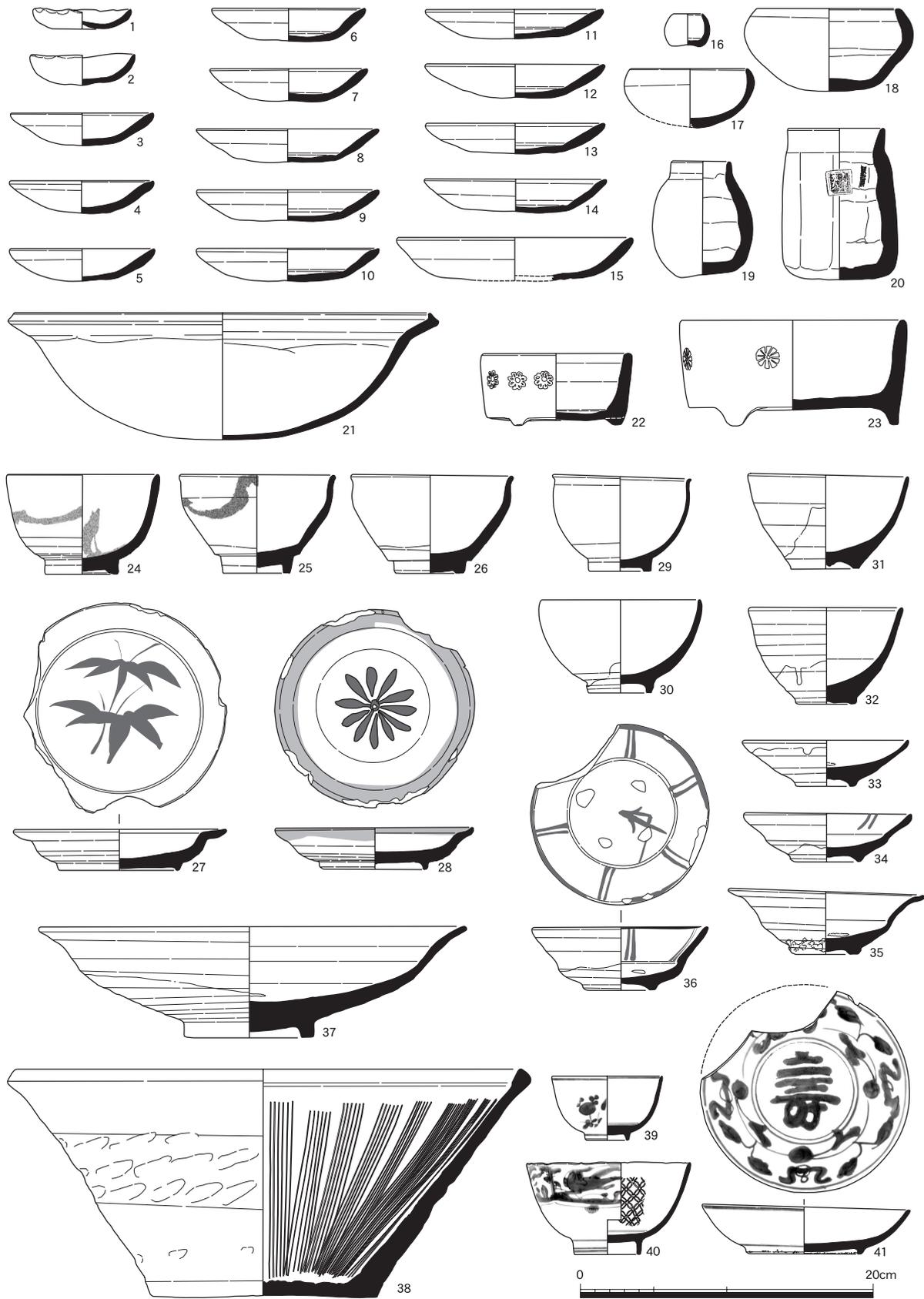
土壌SK2053は調査区中奥部やや南西寄りに位置する東西、南北ともに約8 |の大規模な土壌で、深さは1.2~1.4m。土壌内には、シルト層・砂層・灰層・炭化物層・腐植土層・焼土を含んだ層など多数の層が重層している（図2）。最下層には加工痕のある板材や、ほぞ孔を取った角材の切れ端・鉋屑・大鋸屑などの建築廃材が多量に堆積していた。各層からは17世紀前半代に属する土器・陶磁器類や貝殻・魚骨・鳥骨などの食物残渣、イヌ・ネコ・シカ・カメなどの獣骨、木製品・漆製品・煙管などの金属製品といった豊富な遺物が出土している。最下層の建築廃材は本多家造営に関わる可能性が高い。土壌内に堆積していた塵芥の中には、灰や炭片など他の場所から運ばれてきたものばかりでなく、木片や生ゴミをこの土壌内で焼却した形跡も認められた。

本多甲斐守京邸出土の動物遺存体



- | | | | |
|-----|-----------|-----------|-------------|
| 1 | 5YR3/2 | 暗赤褐色砂泥 | 灰・炭・焼土混 |
| 2 | 2.5YR2/2 | 暗褐色砂泥 | 灰・炭混 |
| 3 | 5YR5/4 | にぶい赤褐色灰層 | |
| 4 | 7.5YR3/3 | 暗褐色泥砂 | 灰混 |
| 5 | 10YR4/6 | 褐色灰層 | |
| 6 | 7.5Y1.7/1 | 黒色炭(藁灰)層 | |
| 7 | 2.5Y3/2 | 黒褐色灰層 | |
| 8 | 10YR1.7/1 | 黒色炭(藁灰)層 | |
| 8' | 10YR4/2 | 灰黄褐色灰層 | |
| 9 | 2.5Y3/1 | 黒褐色灰層 | 炭混 |
| 10 | 2.5Y2/1 | 炭(藁灰)層 | |
| 11 | 7.5YR4/4 | 褐色灰層 | |
| 12 | 7.5YR4/4 | 褐色灰層 | 炭・焼土片混 |
| 13 | 7.5YR5/4 | にぶい褐色灰層 | |
| 14 | 7.5YR5/3 | にぶい褐色灰層 | 炭混 |
| 15 | 10YR5/2 | 灰黄色灰層 | |
| 16 | 10YR3/1 | 黒褐色砂泥 | 小礫・炭片混 |
| 17 | 10YR2/1 | 黒色炭(藁灰)層 | |
| 18 | 10YR2/3 | 黒褐色腐植土層 | |
| 19 | 2.5YR2/1 | 赤黒色砂泥 | 炭・灰多い |
| 20 | 2.5Y2/1 | 黒色炭(藁灰)層 | |
| 21 | 10YR2/2 | 黒褐色腐植土層 | 小礫混 |
| 21' | 10YR2/2 | 黒褐色砂泥 | 腐植土混 |
| 22 | 2.5Y3/1 | 黒褐色シルト | |
| 23 | 10YR3/2 | 黒褐色微砂 | 木片・炭・腐植土混 |
| 24 | 10YR1.7/1 | 黒色炭(藁灰)層 | |
| 25 | 10YR3/3 | 暗褐色腐植土 | |
| 26 | 2.5Y2/2 | 黒色砂泥 | 腐植土混 |
| 26 | 10YR2/3 | 黒褐色腐植土 | |
| 26 | 2.5Y4/1 | 黄灰色泥砂 | 灰混 |
| 27 | 2.5Y3/2 | 暗赤褐色微砂 | 腐植土混 |
| 28 | 7.5YR3/1 | 黒褐色泥砂 | 下部砂質 |
| 29 | 5Y4/1 | 褐灰色シルト | |
| 30 | 2.5Y5/2 | 暗灰黄色灰層 | 炭・焼土混 |
| 31 | 2.5Y5/2 | 暗灰黄色灰層 | 炭・焼土片・小礫混 |
| 32 | 10YR3/1 | 黒褐色微砂 | |
| 33 | 10YR3/4 | 暗褐色腐植土 | 砂混 |
| 34 | 2.5Y5/1 | 黄灰色泥砂 | 炭混 |
| 35 | 2.5Y5/1 | 黄灰色灰層 | |
| 36 | 10YR4/2 | 灰黄褐色シルト | 砂混 |
| 37 | 2.5Y3/2 | 黒褐色泥砂 | 炭・灰混 |
| 38 | 10YR3/4 | 暗褐色灰層 | 砂・炭混 |
| 39 | 2.5Y4/4 | オリーブ褐色灰層 | 小礫混 |
| 40 | 2.5Y6/2 | 灰黄色灰層 | |
| 41 | 2.5Y4/2 | 灰黄色泥砂 | 灰混 |
| 42 | 7.5YR5/3 | にぶい褐色灰層 | 炭片混 |
| 43 | 7.5YR6/3 | にぶい褐色灰層 | 炭混 |
| 44 | 10YR4/1 | 褐灰色灰層 | |
| 45 | 10YR5/1 | 褐灰色灰層 | 炭・細砂混 |
| 46 | 10YR4/6 | 灰層 | 炭混 |
| 47 | 2.5Y6/4 | にぶい黄色腐植土 | 灰混 |
| 48 | 10YR3/2 | 黒褐色砂泥 | 腐植土・炭混 木片多い |
| 49 | 10YR4/3 | にぶい黄褐色砂泥 | 炭・貝片混 |
| 50 | 10YR5/4 | にぶい黄褐色灰層 | |
| 51 | 2.5Y5/2 | 灰層 | 砂・小礫混 |
| 52 | 7.5YR6/4 | 灰層 | 炭少量混 |
| 53 | 10YR6/4 | にぶい黄褐色灰層 | 炭混 |
| 54 | 2.5Y4/1 | 黄灰色シルト | |
| 55 | 2.5Y3/2 | 黒褐色砂泥 | |
| 56 | 10YR2/2 | 黒褐色腐植土層 | |
| 57 | 2.5Y2/1 | 黒色腐植土 | やや粗 炭混 |
| 58 | 2.5Y4/6 | オリーブ褐色泥砂 | 灰混 |
| 59 | 10YR5/2 | 灰黄褐色砂泥 | 炭片・灰混 |
| 60 | 10YR3/1 | 黒褐色灰層 | 炭混 |
| 61 | 10YR3/3 | 暗褐色灰層 | 炭混 |
| 62 | 2.5Y3/2 | 黒褐色泥砂 | |
| 63 | 10YR4/1 | 褐灰色シルト | 灰混 木・貝片混 |
| 63' | 10YR4/1 | 褐灰色シルト | |
| 64 | 2.5Y5/2 | 暗黄灰色砂泥 | 灰混 |
| 65 | 2.5Y4/1 | 黄灰色砂泥 | |
| 66 | 10YR2/3 | 腐植土層 | |
| 67 | 2.5Y4/2 | 暗灰黄色砂泥 | 礫混 |
| 68 | 10YR4/1 | 褐灰色砂泥 | |
| 69 | 10YR4/1 | 褐灰色砂泥 | |
| 70 | 10YR3/3 | 暗褐色砂泥 | |
| 71 | 10YR2/2 | 黒褐色腐植土層 | 木片多い |
| 72 | 2.5Y3/1 | 黒褐色砂泥 | 炭・木片混 |
| 73 | 5Y3/1 | オリーブ黒色細砂 | |
| 74 | 10YR2/1 | 黒色腐植土層 | 炭混 |
| 75 | 2.5Y5/2 | 暗黄灰色砂泥 | 砂混 |
| 76 | 7.5R3/1 | 黒褐色シルト | |
| 77 | 2.5Y3/2 | 黒褐色腐植土層 | |
| 78 | 10YR4/1 | 褐灰色シルト | |
| 79 | 10YR2/3 | 黒褐色腐植土 | 砂混 |
| 80 | 2.5Y3/2 | 腐植土 | 植物質多く含む |
| 81 | 10Y2/3 | 黒褐色腐植土 | 炭混 |
| 82 | 10YR2/2 | 腐植土 | 木片多い |
| 83 | 2.5Y4/1 | 黄灰色シルト | 礫 木片多い |
| 84 | 5Y3/1 | オリーブ黒色シルト | 木片・礫混 |
| 85 | 2.5Y5/1 | 砂泥 | 木片多い |
| 86 | 10YR5/2 | 灰黄色砂泥 | 礫混 |
| 87 | 10YR3/1 | 黒褐色砂泥 | 小礫混 |
| 88 | 10YR5/1 | 褐灰色シルト | 砂混 |
| 89 | 2.5Y4/3 | オリーブ褐色砂泥 | 小礫混 |
| 90 | 2.5Y5/3 | 砂泥 | 黄色粘質土ブロック混 |
| 91 | 5Y4/1 | 灰色シルト | 炭混 |
| 92 | 2.5Y2/2 | 黒褐色細砂 | 腐植土 |
| 93 | 10YR2/1 | 黒色シルト | |
| 94 | 2.5Y3/2 | 黒褐色砂泥 | |
| 95 | 10YR3/2 | 黒褐色泥砂 | 腐植土混 |
| 96 | 7.5Y3/1 | オリーブ黒色シルト | |
| 97 | 7.5Y3/1 | オリーブ黒色シルト | 砂混 木片多い |
| 98 | 5Y2/2 | オリーブ黒色シルト | 砂混 炭片含む |
| 99 | 10Y3/1 | 黒褐色シルト | 木片・植物質多い |

図2 SK2053土層図



1~21 土師器 22・23 瓦器 24~28 美濃 29~35 唐津 38 丹波 39~41 明染付

図3 SK2053出土土器類実測図

また堆積状況からみても一時期に埋め戻されたのではなく、おそらくこの土壌は造営時に廃材の捨て場として掘られ、その後ある程度の期間、ゴミの廃棄場所として使用されていたものと推測できる。出土遺物としては土器類が最も多く、総破片数15,088片と多量に出土している。その内容は土師器が69.8%と7割近くを占めているが、総量が多いため施唐津・美濃・明染付などの釉陶磁器や丹波・信楽焼締陶器にも好資料が多数ある。図3にその一部を掲載しておく。これらの土器類を機能別に見ると椀皿などの供膳具が約79%と大半を占めており、他のものは少ない。出土した土師器皿の形態的特徴からみた年代観は本多家が当地に存在した寛永年間にほぼ一致している。

SK2053の検出位置は油小路から東に、四条坊門から南にそれぞれ約30m隔てた場所である。検出位置や出土遺物の時期から、この土壌を本多甲斐守京邸のゴミ廃棄土壌と推定したが、次にその本多家京邸内でのこの土壌の位置関係や成立期について検討してみよう。

『洛中絵図』には十四町の中央、四周を町屋に囲まれた箇所「本多甲斐守」と記載されている。これによれば本多家の敷地には南北2箇所に入出口があり、四条坊門と錦小路へ抜ける通路が開いている。記載された寸法によると北の通路は油小路から22間東にあり、南に9間で敷地に達する。道幅は記載がないため不明である。敷地の北辺はこの通路を挟んで東に15間2尺、西に9間と記載されている。したがって22間から9間戻った13間が油小路から本多家の敷地西限までの距離となる。『洛中絵図』にはすべての寸法が記されていないことや、単位尺が不明ではあるが、いま仮に蛸薬師通（四条坊門）南辺で実測した油小路-西洞院間の距離129.1mを記載寸法63間で割った約2.04mを1間とすると敷地北辺は四条坊門から南に約18m、西辺は約26mとなり、SK2053が敷地の北西隅付近に位置することがわかる。次にその成立時期であるが、まず『洛中絵図』によって寛永14年時点にはここに本多氏の京邸があったことは明らかである。次に本多甲斐守すなわち本多政朝は、本多平八郎忠勝の次男忠朝の嗣子として慶長四年（1599）に生まれるが、忠勝の長子忠政の養子となり、寛永八年（1631）忠政の逝去にともない家督を継ぐ。したがって『洛中絵図』に「本多甲斐守」と記されているこの屋敷が政朝の段階で造営されたとすれば、その上限を寛永八年とすることができる。

忠政の段階からこの地が本多家によって利用されていたならばそれ以前に遡る可能性があるが、忠政の職名は美濃守であり、『洛中絵図』の「本多甲斐守」の記載と矛盾するため、やはり京邸は政朝の時期に造営されたと見ておくべきであろう。また、土壌の最下層から出土した多量の建築廃材は、この土壌が造営時の廃材処

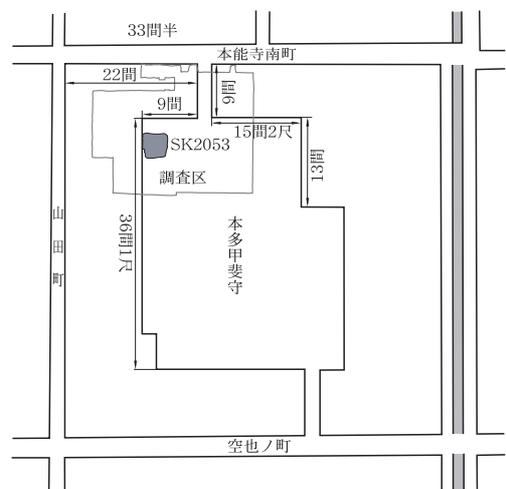


図4 SK2053の位置
（『寛永十四年洛中絵図』をもとに作成）

理に利用されたことを示しており、その点から見ればSK2053の成立期は政朝の相続時に近い時期と推定できる。出土土器類には1620～1650年頃と想定している土師器皿が多量に含まれており、史料からの推定と齟齬はない。以上の点からSK2053は1630年代のおそらく早い段階に造営時の廃材処理用として成立し、堆積状況からその後ゴミの廃棄場所としてしばらく使用されていたものと推測できる。そして政朝が没する寛永十五年（1638）頃まで存続していたものと思われる。

3. SK2053から出土した動物遺存体

平安京左京四條二坊十二町の発掘調査によって、中世から近世の動物遺存体が1,663点出土した。これらのほとんどが江戸時代、特に17世紀から18世紀を主体とするものである。多くの動物遺存体は、土坑や井戸などの遺構から出土し、わずかに遺物包含層からも出土している。その中でも土壙SK2053は、1,173点と動物遺存体が最も多く出土した遺構であり、破片数にして全体の約7割を占める。本稿では、この土壙SK2053から出土した動物遺存体について報告する。

土坑SK2053は、8 m四方、深さ1.4mの規模で、17世紀第2 四半世紀と時期が限定され、その底部では鉋屑が多く出土しており、建造期の廃棄物を埋めたものと推定された。当地は、寛永14年製作の洛中絵図に、本多甲斐守の京屋敷として描かれており、本多邸建造期からその直後に残された遺構と推定される。したがって、本多甲斐守の京屋敷における建造前後の営みを示す残滓と考えられ、一括して出土した動物遺存体は当時の動物利用を示すものと位置付けられる。

なお、動物遺存体の同定は、貝類が北野信彦、それ以外を富岡直人と丸山真史で行った。また、計測は、貝類をくらしき作陽大学の学生諸氏が北野の指導のもとに行い、それ以外は富岡、丸山が行った。本文の記載については丸山が執筆し、富岡がこれを補助した。

A 概要

SK2053から出土した動物遺存体は、発掘調査中に肉眼で確認されたもののほか、3 mm目のフルイを使用して、埋土の一部を水洗選別することで得られたものが含まれる。土坑内は水分を多く含んだ土壌であり、貝類も多く廃棄されていたことから、動物遺存体は微生物や酸性土壌による分解を免れたと考えられる。

出土した資料点数は貝類が727点（63%）と最多で、魚類が319点（27%）、哺乳類52点（4%）、鳥類52点（4%）と続き、このほか爬虫類20点、陸産貝類7点、頭足類1点、サンゴ類1点である（表1、図5）。貝類は淡水産貝類が22点、海水産貝類が705点であり、ハマグリが321点で最も多い。魚類は淡水産魚類が10点、海水産魚類が309点出土しており、マダイが174点と最も多い。貝類、魚類ともに海水産資源が圧倒的に多く、

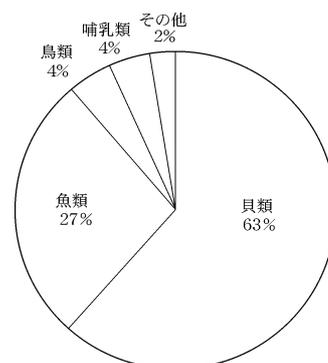


図5 動物遺存体の組成

表1 種名表 (SK2053)

刺胞動物門 Cnidaria	カサゴ目 Gadiformes
花虫綱 Anthozoa	フサカサゴ科 Scorpaenidae
花虫綱の一種 Anthozoa fam., gen. et sp. indet.	フサカサゴ科の一種 Scorpaenidae gen. et sp. indet.
軟体動物門 Mollusca	コチ科 Platycephalidae
腹足綱 Gastropoda	マゴチ Platycephalus sp.
古腹足目 Vetigastropoda	コチ科の一種 Platycephalidae, gen. et sp. indet.
ミミガイ科 Haliotidae	スズキ目 Percidae
ミミガイ科の一種 Haliotidae gen. et sp. indet.	スズキ科 Percichthyidae
サザエ科 Turbnidae	スズキ <i>Lateolabrax japonicus</i>
サザエ Turbo cornutus	ハタ科 Serranidae
ニシキウズガイ科 Trochidae	ハタ科の一種 Serranidae, gen. et sp. indet.
イボキサゴ <i>Umbonium moniliferum</i>	アマダイ科 Branchiostegidae
盤足目 Discopoda	アマダイ属 Branchiostegus sp.
タマガイ科 Naticidae	シイラ科 Coryphaenidae
ツメタガイ <i>Glosaulax didyma</i>	シイラ <i>Coyphaena hippurus</i>
新腹足目 Neogastropoda	アジ科 Carangiae
アッキガイ科 Muricidae	ブリ <i>Seriola quinqueradiata</i>
アカニシ <i>Rapana venosa</i>	ブリ属の一種 <i>Seriola</i> sp.
エゾバイ科 Buccinidae	アジ科の一種 Carangiae, gen. et sp. indet.
バイ <i>Balytonia japonica</i>	タイ科 Sparidae
テングニシ科 Melongenidae	マダイ <i>Pagrus major</i>
テングニシ <i>Hemifusus tuba</i>	チダイ <i>Evynnis cardinalis</i>
斧足綱 Bivalvia	キダイ <i>Dentex tumifrons</i>
フネガイ目 Arcoida	タイ科の一種 Sparidae, gen. et sp. indet.
フネガイ科 Arcidae	カマス科 Sphyracnidae
アカガイ <i>Scapharca broughtonii</i>	カマス科の一種 Sphyracnidae, gen. et sp. indet.
ハイガイ <i>Tegillarca granosa</i>	サバ科 Scombridae
ウグイスガイ目 Pterioida	サバ属の一種 Scomber sp.
ハボウキガイ科 Pinnidae	ソウダガツオ属の一種 <i>Auxis</i> sp.
タイラギ <i>Atrina pectinata</i>	カツオ <i>Katsuwonus pelamis</i>
カキ目 Ostreoidae	サワラ <i>Scomberomorus nipponius</i>
イタヤガイ科 Pectinidae	サバ科の一種 Scombridae gen. et sp. indet.
イタヤガイ <i>Pecten albicans</i>	カレイ目 Pleuronectiformes
イタボガキ科 Ostreidae gen. et sp.	カレイ科 Pleuronectidae
イタボガキ科の一種 Ostreidae	カレイ科の一種 Pleuronectidae gen. et sp. Indet.
マルスダレカイ目 Veneroidea	フグ目 Tetraodontiformes
シジミ科 Corbiculidae	フグ科 Tetraodontidae
マシジミ <i>Corbicula leana</i>	フグ科の一種 Tetraodontidae, gen. et sp. indet.
セタシジミ <i>Corbicula sandai</i>	爬虫綱 Reptilia
シジミ科の一種 Corbiculidae gen. et sp. indet.	カメ目 Chlonia
マルスダレガイ科 Veneridae	ヌマガメ科 Geoemydidae
アサリ <i>Ruditapes philippinarum</i>	ヌマガメ科の一種 Geoemydidae gen. et sp. indet.
ハマグリ <i>Meretrix lusoria</i>	鳥綱 Aves
チョウセンハマグリ <i>Meretrix Lamarckii</i>	カモ目 Anseriformes
オキシジミ <i>Cyclina sinensis</i>	カモ科 Anatidae
頭足綱 Cephalopoda	カモ科の一種 Anatidae gen. et sp. indet.
コウイカ目 Sepioida	コウノトリ目 Ciconiiformes
コウイカ科 Sepioidae	サギ科 Aridae
コウイカ科の一種 Sepioidae gen. et sp. indet.	サギ科の一種 Aridae gen. et sp. indet.
脊椎動物門 Vertebrata	キジ目 Galliformes
硬骨魚綱 Osteichthyes	キジ科 Phasianidae
ウナギ目 Anguilliformes	ニワトリ属の一種 <i>Gullus domesticus</i>
ハモ科 Muraenesocidae	キジ科の一種 Phasianidae gen. et sp. indet.
ハモ属の一種 Muraenesox sp.	哺乳綱 Mammalia
ニシン目 Cluperiformes	食肉目 Carnivora
ニシン科 Clupeidae	ネコ科 Felidae
ニシン科の一種 Cluperiformes gen. et sp. indet.	ネコ <i>Felis catus</i>
コイ目 Cyprinida	イヌ科 Canidae
コイ科 Cyprinidae	イヌ <i>Canis familiaris</i>
コイ <i>Cyprinus carpio</i>	クマ科 Ursidae
フナ属 Carussius sp.	ツキノワグマ <i>Urusus thibetanus</i>
コイ科の一種 Cyprinidae gen. et sp. indet.	偶蹄目 Artiodactyla
ナマズ目 Siluriformes	ウシ科 Bovidae
ナマズ科 Siluridae	カモシカ <i>Capricornis crispus</i>
ナマズ属の一種 Silurus sp.	イノシシ科 Suidae
タラ目 Gadiformes	イノシシ <i>Sus scrofa</i>
タラ科 Gadidae	シカ科 Cervidae
マダラ <i>Gadus macrocephalus</i>	ニホンジカ <i>Cervus Nippon</i>
タラ科の一種 Gadidae gen. et sp. indet.	齧歯目 Rodentia
メダカ目 Cyprinodontiformes	ネズミ科 Muridae
トビウオ科 Exocoetidae	ネズミ科の一種 Muridae gen. et sp. indet.
トビウオ科の一種 Exocoetidae gen. et sp. indet.	

約97%を占める。鳥類はカモ科が44点、哺乳類ではニホンジカが35点と最も多く出土している。魚類、鳥類、哺乳類には解体や筋肉を取り外す際に残されたカットマークが見られる。その内訳は、魚類80点、鳥類10点、哺乳類11点、計101点と全体の約8%である（マダイ48点、カツオ2点、サワラ1点、シイラ1点、スズキ2点、タイ科8点、タラ科2点、ナマズ属1点、ハタ科3点、ハモ属4点、ブリ属8点、カモ科8点、サギ科1点、ニワトリ1点、ニホンジカ9点、カモシカ1点、イヌ1点）。

これら動物遺存体のほとんどが食用・あるいは薬用（註1）となったであろうが、サング類、フジツボ類、ヘビガイ、ネコ、ネズミ類は食用とならなかったと考えられる。

B 魚貝類の利用

貝類の利用

淡水産貝類は、シジミガイ科が17点、タニシ類が4点、マツカサガイが1点出土しており、シジミガイ科の一部はセタシジミとマシジミが同定できた。一方、海水産貝類は、ハマグリが321点と卓越しており、次いでサザエが111点、アカガイが98点、ミミガイ科（アワビ類）が68点と続き、これらの種類が貝類の8割強を占める（図6）。このほかアサリが29点、アカニシが18点、パイが17点、イタヤガイが10点、カキ類が8点、ツメタガイ7点、オキシジミが5点、ハイガイが5点、タイラギ、チョウセンハマグリ、テングニシ、イボキサゴ、フネガイ科の一種が1点ずつ出土している。

淡水産貝類のシジミやタニシは、琵琶湖をはじめ、周辺の河川や湖沼でも採集された可能性が高い。一方、サザエやアワビは外海岩礁域、パイやイタヤガイなどは沿岸砂泥底、ハマグリ、アサリ、ツメタガイなどは内湾砂底、アカニシやアカガイは内湾泥底、ハイガイやオキシジミなどは干潟に生息する。これら海水産貝類は、種類数、量、生息の分布から見ても、屋敷に関連する人々の手によって捕獲されたものではなく、すべて搬入品として良いだろう。それぞれの産地を比定することは難しいが、日本海、瀬戸内海、太平洋のいずれからも流通していたと考えられる。

シジミガイ科1個体の肉量は少なく、調理する際もシジミ汁、シジミ飯など、あるいは出汁として利用されることが多く、一回の調理における使用量は他の貝類に比べて多いはずである。しかしながら、シジミガイ科の出土量が多くないことは、シジミガイ科を利用する機会が少なかったためと考えられる。平安京土御門烏丸内裏跡、二条家公家屋敷跡、平安京左京北辺四坊などでは、シジミガイ科は多種に比べ多く出土していることから、シジミガイ科の出土量の少なさも当遺跡の特徴と言える。ハマグリは、調理方法によって大きさが使い分けられることや（桜井1987）、階層によって大きさに差異が生じていることから選択的な搬入が論じられている（赤松1999、池田2005）。出土した資料の大きさは、殻高40mmから45mmに最も集中し、殻高30mmから35mmもやや多い（図7）。大まかにみて、殻高40mmから50mmの中形個体が多く利用されたのであろう。た

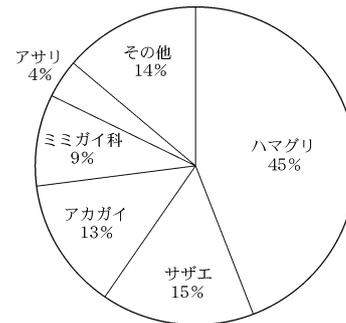


図6 貝類の組成

だ、小型や大型のハマグリも一定量が出土していることから、吸い物や焼きハマグリなど様々に調理されただろう。サザエは、殻に棘が有る個体と無い個体の両者が混在する。棘があるサザエは外海、棘がないサザエは内海に多いと言われることもある。しかし、棘の有無によって外海と内海のサザエの生息を完全に二分化することはできないことから、これら両者が異なる場所で採集されたと断定することは困難である。アカガイは、殻高75mmから80mmに最も集中しており、ハマグリとは異なり集中密度が高く、大きさの選択性が強く反映されていると考えられる(図8)。

京都や大阪の近世遺跡におけるアサリの出土は低調であり、本遺跡におけるアサリの出土は特筆される。大きさは殻高25mmから30mmに最も集中するが、ハマグリやアカガイのようなばらつきは見られない(図9)。最近では、大阪の久留米藩蔵屋敷跡や広島藩蔵屋敷跡などで、アサリのまとまった出土が見られるが、これら以外の遺跡からは少ない。近世の近畿地方でアサリの出土が少ないのは、当地域の資源量の乏しさに起因していると考えられている(池田2004)。おそらく京都市内の近世遺跡では本例が初出であろう。今日では、京都や大阪でもアサリは普及しているが、江戸時代以前にはあまり流通、消費され

ていなかったと考えられる。京都と大阪でアサリが出土した近世遺跡は、本遺跡、久留米藩蔵屋敷、広島藩蔵屋敷と武家屋敷に出土が多い。アサリが高級な食材ではなく、資源量が乏しいのであれば、それぞれの武家屋敷に居住する人々の嗜好を示す可能性が指摘される。今後、資料の増加を待たねば結論づけることはできないが、当遺跡は播州の姫路藩主である本多甲斐守の京屋敷であり、大坂堂島の蔵屋敷も久留米藩や広島藩といった京都、大坂を本拠とする屋敷ではないことが注目される。そして、大坂城下町の魚市場跡からの出土も少ないことから、近世の京坂におけるアサリの流通は乏しかったと考えられる。これは、『本朝食鑑』の「和泉、摂州、播州に少ない」という記述に対応するが、本多甲斐守の本拠である姫路藩においても、アサリが少なかった

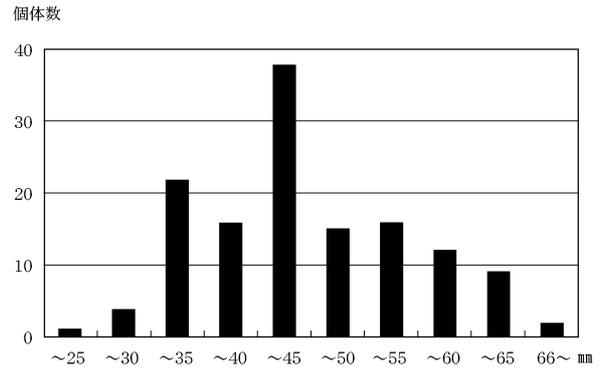


図7 ハマグリの高分布

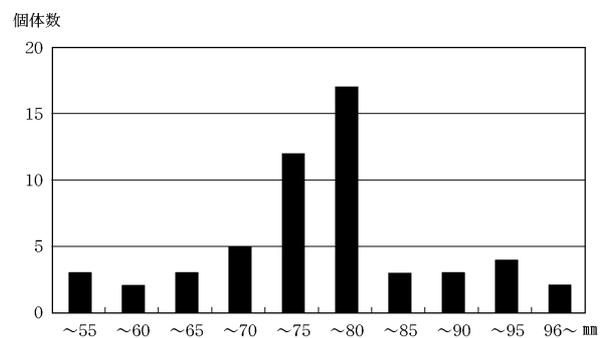


図8 アカガイの高分布

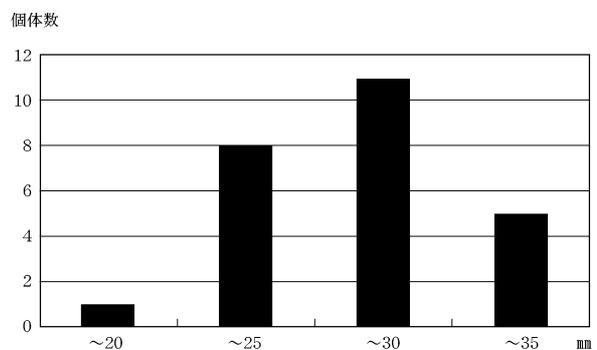


図9 アサリの高分布

ということになる。

これらのほかハイガイ、イタボガキ、イタヤガイ、タイラギ、ツメタガイ、オキシジミなどは、全て食用となったのであろう。ただし、イタヤガイ1点は、穿孔され紐を通した痕跡が見られることから、貝杓子として利用されたと考えられる。

魚類の利用

淡水産魚類は、フナ属が5点、コイが3点、ナマズ属、コイ科が1点ずつ出土している。海水産貝類は、マダイが174点と卓越しており、魚類の約半数を占める(図10)。

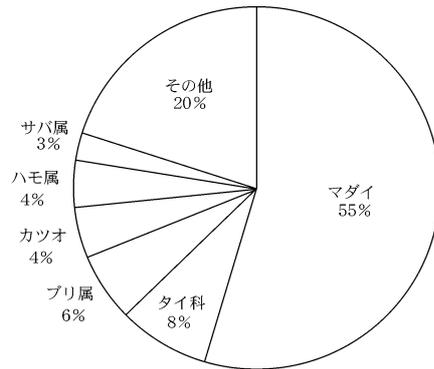


図10 魚類の組成

次に多いのはマダイ、キダイ、チダイなどを含むタイ科が30点で、先のマダイとあわせて6割強を占める。続いて、ブリ属の一種が20点、カツオが13点、ハモ属が12点、サバ属が8点出土している。ブリ属には、ブリ、カンバチ、ヒラマサが含まれ、ブリが同定できた。このほか、イワシ類、タラ科、キダイ、サワラ、スズキ、コチ科が6点ずつ、フナ属が5点、ハタ科が4点、シイラ、アマダイ属が3点ずつ、アジ科、カマス科が2点ずつ、ソウダカツオ属、サバ科、カレイ科、チダイ、トビウオ科、フグ科が1点ずつ出土している。

淡水産魚類のフナ属、コイ、ナマズ属は、淡水産貝類と同様に、琵琶湖や周辺の河川、湖沼でも漁獲することは可能である。一方、海水産魚類は、カツオ、ソウダカツオ属、シイラ、トビウオ科は、瀬戸内海に生息しておらず、日本海や太平洋で漁獲されたものであろう。他の種類は、日本海や太平洋以外に瀬戸内海でも漁獲される。水産物の遠隔地流通は、平安時代の『延喜式』などによって、若狭、淡路、志摩といった「御食国」が朝廷へ海産物を納めていたことが知られる。近世もまた、これら日本海、瀬戸内海、太平洋の沿岸地域から海産物が運ばれていたであろう。

近世遺跡における魚類の出土は、マダイの割合が高いことが特徴の一つとしてあげられる。これはマダイの骨が大きく、頑強であることから、イヌなどの死肉をあさる動物の食害にあうことなく遺跡に保存される可能性が高いことや、発掘調査中に肉眼で見えやすいことがその理由としてあげられる。しかしながら、これほどマダイが卓越する背景には、実際のマダイの消費、廃棄量が多かったと考えてよいだろう。京都と大阪の近世遺跡では、マダイはクロダイやキダイ、チダイなどタイ科魚類の中で最も多く出土する。西日本では、中世以来、黒色のクロダイよりも赤色のマダイが嗜好されたと言われ(久保1997)、京都市内におけるこの傾向は顕著であり、これまでクロダイ属の出土はない。西日本でも、岡山城跡や萩城跡でクロダイ属は出土しており、江戸の諸遺跡や名古屋城跡など各地の近世遺跡と比較すれば地域的な特徴と言える。京都市内の遺跡について見ても、武家屋敷、公家屋敷、町屋といった階層による消費の相違ではないということが指摘できる。マダイの前頭骨25点中19点が正中方向に切断された「兜割り」が見られ、兜煮や潮汁などに利用されたのであろう。このほか前上顎骨、歯骨、角骨、前鰓蓋骨、椎骨など多

くの部位にカットマークが見られる。同じタイ科に属するキダイやチダイもまた、出土量は少ないが京都の近世遺跡からよく出土し、本遺跡でも両者が出土している。キダイとチダイは、クロダイと異なり赤色であるが、マダイとは区別されていた。キダイは若狭で、小鯛の笹漬けなど加工食品として賞味される。キダイ、チダイともに前頭骨、上後頭骨、前上顎骨などの頭部が出土しており、尾頭付きでマダイの代用とされた可能性も考えられるだろう。

今日の京都や大阪において、ハモは夏の風物詩であり、京都の祇園祭、大阪の天神祭には欠かせない食材である。ハモは東日本にも生息しており、千葉県や茨城県などの縄文貝塚からも出土している。天保年間に刊行された『江戸繁盛記』には、板橋の魚市場にハモが並んでいる様子が記されているが（寺門1974）、江戸諸遺跡からの出土は低調である。岡山城跡や中世の草戸千軒町遺跡からもハモ属は出土しており、瀬戸内では一般的に賞味されたのであろう。その中でも、京都と大阪の食文化を代表する魚類になったことは、中近世における料理の発達と関連している。ハモは小骨が多く、練り物などにしない限り、骨切りをしないと非常に食べにくい。骨切りは1730年刊行の『料理綱目調味抄』が初見とされており、生命力の強いハモは生魚として京都に搬入することができ、京都の人々が何とかこのハモを賞味するために骨切りがうまれたのではないかとされる（川那部2000）。前頭骨が正中方向に切断されており、吸い物などの出汁として利用されたのだろう。また、歯骨には正中方向と垂直にカットマークが見られる。ブリは、京都の正月に欠かせない食材であり、冬を代表する大型の魚類である。また、出世魚としても有名であり、関西ではツバス、ハマチ、メジロ、ブリと呼称が変化する。出土した資料には、中形のハマチから大形のブリが出土している。京都府北部は近年でもブリの漁獲が盛んである。ブリの椎骨には、正中方向と垂直に切断されたものがあり、当地において尾頭が切り離されたと考えられる。

サバ属、カツオ、サワラ、ソウダガツオ属といったサバ科魚類が出土しているが、そのなかでカツオが最も多い。京都では、福井県小浜から滋賀県を通過し京都盆地に至る「鯖街道」と称される経路によって、若狭から魚貝類が輸送されていたことは有名である。その代表的な種類がサバであるが、本遺跡ではサバよりもカツオが多く出土することは興味深い。当遺跡における海産物消費の一つの特徴と言えるだろう。カツオは、『本朝食鑑』に「京師には冬月には希に紀伊・伊勢および海西諸州から伝送されてくることがある。遠路のため魚が餒る（腐る）ので、夏秋には到来しない」と記載されている（人見1980）。椎骨だけでなく、歯骨、角骨、主鰓蓋骨など頭部も出土しており、鰹節や干物でなく一塩物や鮮魚に近い状態で京都まで運ばれたのかもしれない。

このほかタラ科、シイラ、トビウオ科、ボラ科、アマダイ属、ハタ科、コチ科、カマス科、スズキ、カレイ科、フグ科などが出土している。京都市内の近世遺跡では、出土量が多くはないがシイラ、カマス科、トビウオ科がしばしば出土する。今日では両種とも食卓に上がる機会が少なくなったが、京都の食文化を考える上で重要な種類となるだろう。タラやアマダイは、今日でも京都の食文化を代表する魚類であり、それらは越前や若狭といった日本海側から多く運ばれてきたものと考えられる。また、本遺跡におけるフグ科の出土も注目される。これまで京都市内の近世遺跡では出土が少なく、平安京左京六条三坊五町から出土しているだけである（丸山・松井

2005)。京都に搬入されるフグは干物が多かったと想定されるが、干物は頭部を取り除かれる場合が多く、主上顎骨が出土していることから異なる形状で搬入された可能性も考えられる。

淡水産のコイ、フナ属、ナマズ属も出土しているが、出土量は多くない。内陸の京都では川魚の店もあり重要な水産物であったはずであるが、海水産魚類が幅広く利用されるようになっていたと想定される。ただし、アユなど淡水産の小魚は遺跡に保存される可能性は低く、保存されたとしても1mm目以下のフルイを使用しなければ採取は困難であり見逃されている可能性もある。『京都名所図絵』には大堰川や宇治川におけるアユ漁の様子が描かれていることから、京都の人々には馴染みの魚であったと思われる。また、ウナギについても、宇治が蒲焼きの発祥と言われることもあり、アユなどと同様のことが考えられるだろう。

近世遺跡における魚類遺存体は、椎骨の出土比率が低いという指摘がある（久保1997）。本遺跡では、遺構の埋土の一部を篩にかけているが、やはり椎骨の量は少なく、当地への魚の搬入、調理形態を反映していると考えられる。

C 鳥獣類の利用

鳥類の利用

鳥類は、カモ科が44点と最多で、ニワトリが5点、サギ科、キジ属、キジ科が1点ずつ出土している。カモ科には、マガモ、マガン、ヒシクイ、ハクチョウなど多種が含まれており、出土した資料は大きさからカモ類が11点、ガン類が6点、ヒシクイ大が17点である。このことから少なくとも3種類以上のカモ科鳥類が利用されたと考えられる。京都市内の近世遺跡では、しばしばカモ科が出土するが、一つの遺構からこのように鳥類がまとまって出土することは稀である。

カモ科には頭蓋骨の後頭部が切断されているものや、上腕骨の近位端が切断されているものがある。庖丁によって、首や手羽を切り離れた痕跡である。このことから鳥類は、骨ごと断ち切って解体していたと考えられる。こういった解体痕は、尼崎の大物遺跡の鎌倉時代の鳥類にも見られる（丸山・藤澤・松井2005）。アオサギやニワトリの骨にもカットマークがあり、解体され食用となっていたと考えられる。

『雍州府志』には、鷺、鴨、雉、諸禽（鶏）などが市中にて売られていることが記されている（立川1999）。また、カモやキジは、鷹狩りの対象となっていた。近世も肉食は禁忌の対象であったが、鳥類はそれには含まれず、食肉として利用されたであろう。カモ科は、頭蓋骨が出土しており、首の付け根を切断したと考えられることから、当地に一羽を持ち込み解体、調理したと推測される。

哺乳類の利用

哺乳類は、ニホンジカが35点と最多で、同一個体のものと思われる椎骨（頸椎、胸椎、腰椎、仙骨）が出土している。それとは別に同一個体の橈骨と尺骨も出土している。椎骨と一部の四肢骨が同一個体である可能性もある。左の上顎骨が2点出土していることから、最小個体数は2個体となる。胸椎と腰椎は棘突起に、肋骨は外側に、大腿骨は近位端にカットマークが見られる。

次に多いのはネコで13点が出土しており、そのうち上腕骨（左右）、尺骨（左右）、橈骨（左右）、大腿骨（左右）が同一個体と思われる。左の橈骨が2点出土していることから、最小の個体数は2個体となる。続いて、イヌ、ツキノワグマ、カモシカ、ネズミ科が1点ずつ出土している。カモシカの角は、頭蓋骨から切り離されている。イヌは頭蓋骨がほぼ完存しており、最大長が174.4mmを測り、体高46.6cm程度と推定される（山内1958）。長谷部（1952）の分類で、中級に相当する（表2）。中近世の遺跡から出土するイヌに一般的な大きさである。このイヌの頭頂骨に、少なくとも2条の浅いカットマークが見られる（図11）。



図11 イヌの頭蓋骨

ニホンジカの骨に見られるカットマークは、大腿骨は寛骨から切り離した解体痕であろうが、椎骨や肋骨は肉を取り外した痕跡と考えられる。カモシカの角は、断片的にしか観察できないが、鋸で切断された可能性があり、牛角と同様に細工しようとしたのかもしれない。イヌの頭頂骨に見られるカットマークは、解体か肉を取り外した可能性がある。イヌは人間の食料となるほか、ワシ、タカなど鳥類の餌としても用いられる。一方、ネコには解体痕がなく、食料となった可能性は低く、ネズミも同様である。

ニホンジカやイヌに見られるカットマークは、これらの動物が食肉として利用された可能性を示唆する。平安京左京六条三坊五町では、安土・桃山期の井戸にニホンジカの前肢と後肢が胴部から切り離された状態で廃棄されており、肉を目的として屋敷地に持ち込まれたと考えられる（丸山・松井2005）。これらは、近世の京都における鹿狩りや肉食が行われていたことを示唆する。

表2 イヌ頭蓋骨の計測値（mm）

計測項目	計測点	斉藤No.	イヌ
頭蓋最大長	i-pr	1	174.4
基底全長	pr-		160.4
頬骨弓幅	zy-zy	8	105.9
脳頭蓋長	na-l	9	91.5
頭蓋幅（1）	eu-eu	35	62.8
頭蓋高（1）	ho-hr	152	51.0
バジオン・プレグマ高	ba-br	-	66.5
最小前頭幅	fs-fs	40	37.6
前頭骨頬骨突起端幅	ect-ect	41	51.2
後三角幅	ot-ot	144	66.0
最小眼窩幅	ent-ent	42	34.1
顔長	pr-na	33	82.4
吻長（1）	pr-oa	64	73.8
吻幅（犬歯部）		46	35.0
吻高	na-	162	40.5
鼻骨凹陷環		73	7.2
硬口蓋骨長	pr-sta	86	84.4
硬口蓋最大幅		125	60.9

D その他の動物遺存体

ヌマガメ科が20点、イカ類（甲羅を有する種類）が1点出土している。ヌマガメ科は寛骨1点を除き、同一個体のものであり、甲羅は背甲、腹甲ともに完存している。イカ類は甲羅が出土しており、当地にて甲羅を外したことが分かる。これらのほか、サンゴ類が1点、フジツボ類が2点、ヘビガイ科が1点、陸産貝類が7点出土しているが、すべて食用とは考えられない。

E 本多甲斐守京屋敷における動物利用

動物遺存体が豊富に出土した土坑SK2053は、規模が大きく長期にわたってゴミ穴として利用されたと考えられる。ハモ、タラ、カツオは、近畿地方周辺での漁獲季節が夏・秋・冬にまたがっており、複数季節に捕獲されたものが、廃棄された坑であったと推定される。内陸部の京都盆地において海産資源を多用しており、そのなかでもハマグリ、アワビ、サザエ、マダイといった遠隔地から搬入された貴重な食材の利用が目立つ点が本遺跡の特徴である。マダイが遺跡で保存されやすいことを考慮しても、圧倒的な出土量を見ることから利用頻度は高かったのであろう。これらのような高級種を賞味することができることは、経済的な余裕があったことを示す。

ハマグリ、サザエ、アワビ、アカガイ、マダイ、ハモ、ブリといった水産物が利用されるほか、ガンやカモといった鳥類もお膳に上がっていたであろう。おそらく、ニホンジカも食肉として賞味されたはずである。また、ハモ、ブリ、タラ、アマダイといった現代でも京都の魚食文化を代表する種類が出土しており、すでに近世初期には、こういった海産物が京都市中で購入することができるようになっていたのであろう。アサリやフグは、京都ではあまり出土しないことから嗜好を反映している可能性がある。

近世の京都市中では、魚貝類や鳥類を魚店などで購入することができたであろうが、ニホンジカ、カモシカ、ツキノワグマは狩猟によって獲られた可能性も考えられる。元禄年間の生類憐み政策以前は、将軍や大名による狩猟がしばしば行われていた。特に、ニホンジカは同一個体の椎骨に解体痕があり、肋骨にも肉を取り外した痕跡が見られることから屋敷に持ち込まれ、解体されたと考えられる。しかし、カモシカは角だけで、前頭骨から鋸で切断されている可能性があることから、必ずしも屋敷に1頭を持ち運んだとは限らない。また、ツキノワグマも大坂城下町に出土例があり、近世には流通販路が存在した可能性が考えられる。カモシカやツキノワグマは、角と脛骨が一点ずつ出土したのみであることから、どのように位置付けられるべき資料か判然としない。

この土坑SK2053は、屋敷の建造期からゴミ穴として利用されているのだが、上記のような魚貝類の特徴を見る限り、建造後に屋敷において消費された食料残滓の可能性が高い。屋敷の主人である本多甲斐守が、この屋敷を利用した際に賞味した食材や、客人を招いた宴会で振る舞われた食材であったのではないだろうか。断定はできないが、京都滞在中には狩りを行った可能性が考えられ、その対象は野生獣のニホンジカのほか、カモ、キジといった野鳥も購入するだけではなかったのかもしれない。

まとめ

平安京左京四条二坊十四町から、土坑や井戸から夥しい数の動物遺存体が出土した。そのなかでも土坑SK2053は、大規模なゴミ捨て穴であり、最も多くの動物遺存体が出土した。この土坑は、本多甲斐守京屋敷の建造期から生活期間に使用されたと考えられる。

貝類、魚類、鳥類、哺乳類が主体であり、貝類や魚類は、淡水産よりも海水産の種類が圧倒的に多い。貝類はハマグリ、サザエ、ミミガイ科が、魚類はマダイやブリが多く出土しており、いずれも高級種であることから経済的に豊かであったことが想定される。出土する海水産魚類は、屋敷の建造期ではなく、屋敷における食生活を反映していると考えられる。哺乳類は、ニホンジカが多く出土しており、同じ個体の頸椎、胸椎、腰椎、仙骨が出土しており、解体痕が見られることから屋敷地にて解体が行われたと考えられる。鳥類は、市中の店で販売されるカモ科、サギ科、ニワトリが出土している。ニホンジカやカモ科は、本多家で行われた狩りの獲物かもしれない。

本稿では、他の遺構から出土した動物遺存体について触れておらず、同時期の他遺構の様相や時期的な変遷を見ることができなかった。今後、他の近世遺跡との比較を含め、京都の武家屋敷における食生活など動物資源の利用について検討しなければならない。

註1 薬用になった可能性のあるものとしては、サンゴ類やツキノワグマが挙げられる。

参考文献

- 赤松和佳1999「有岡城跡・伊丹郷町出土の貝類」『有岡城跡・伊丹郷町VI』伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所pp.221-237
- 池田研2004「大坂城下町跡出土貝類の分析」『大坂城下町跡』Ⅱ（財）大阪市文化財協会pp.452-467
- 池田研2005「中・近世における大坂城下町出土の貝類について」『待兼山考古学論集』pp.859-886
- 川那部浩也2000『魚々食紀』平凡社新書
- 久保和士1995「平安京左京六条三坊七町の動物遺体」『平安京左京六条三坊七町』京都文化博物館pp.153-160
- 桜井準也1987「近世大名屋敷における食生活」『史学』57巻1号pp.79-97
- 久保和士1997「近世大坂における水産物の流通と消費」『動物と人間の考古学』真陽社pp.137-179
- 立川美彦編1997『訓読 雍州府志』臨川書店
- 塚本学1983『生類をめぐる政治—元禄のフォークロア』平凡社
- 寺門静軒1974『江戸繁盛記』1 朝倉治彦・安藤菊二校注 平凡社
- 長谷部言人1952「犬骨」『吉胡貝塚』文化庁pp.146-150
- 原田信男1989『江戸の料理史』中公新書
- 人見必大1980『本朝食鑑』4 島田勇雄訳注 平凡社
- 丸山真史・藤澤珠織・松井章2005「大物遺跡出土の人骨および打動物遺存体について」『尼崎市埋蔵文化財調査年報平成7年度（6）』尼崎市教育委員会pp.31-59

丸山真史・富岡直人・平尾政幸

丸山真史・松井章2005「平安京左京六条三坊五町から出土した脊椎動物遺存体」『平安京左京六条三坊五町跡 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告書2005-8』（財）京都市埋蔵文化財研究所

山内忠平1958「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』第7号pp.125-131

表3 貝類集計表

腹足綱	計	斧足綱	L	R	-	計
アカニシ	18	アカガイ	40	41	17	96
イボキサゴ	1	ハイガイ	3	2		5
サザエ	111	フネガイ科			1	1
タニシ	4	イタヤガイ		3	7	10
ツメタガイ	7	オキシジミ	2	1	2	5
テングニシ	1	イタボガキ科		1	7	8
バイ	13	セタシジミ	1			1
バイ属	4	マシジミ	1			1
フジツボ	2	シジミガイ科	6	6	3	15
ヘビガイ	1	ハマグリ	135	134	52	321
マツカサガイ	1	チョウセンハマグリ	1			1
ミミガイ科	68	アサリ	15	14		29
計	231	タイラギ	1			1
		計				496

表4 魚類集計表

魚類	前頭骨		前上顎骨		主上顎骨		歯骨		角骨		方骨		舌顎骨		主鰓蓋骨		前鰓蓋骨		椎骨	その他	計
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R					
コイ							1	1												咽頭骨(L1)	3
フナ属							1	1							1	1				下鰓蓋骨(R1)	5
コイ科																				下鰓蓋骨(L1)	1
ナマズ属																				擬鎖骨(L1)	1
イワシ属																			6		6
ハモ属	3				1	1	1	1	1			1		2	1					前上顎骨-篩骨-鋤骨板1	13
マダラ							1								1					擬鎖骨(R1)	4
タラ科																					2
マゴチ							1														1
コチ科																		1		擬鎖骨(R1) 骨板骨(R1) 上舌骨+角舌骨(L1)	4
シイラ																			3		3
トビウオ科																			1		1
アマダイ属			1											1		1					3
スズキ				1	1		2													口蓋骨(L1) 副蝶形骨1	5
ハタ科						1			1						1					主鰓蓋骨(不明1)	4
ブリ						1									2	1		2		肩甲骨(L1) 上舌骨(L1)	8
ブリ属						1	1										1	7		角舌骨(L1) 下鰓蓋骨(R1)	12
アジ科																			1	基後頭骨1	2
チダイ																				上後頭骨1	1
キダイ			1	1		1	1								1					擬鎖骨(R1)	6
マダイ	27	14	9	4	2	3	8	4	3	1	1	2	3	14	12	9	9	8		下鰓蓋骨(L1R1) 角舌骨(L1R1)) 間鰓蓋骨(L2R4) 基後頭骨1 擬鎖骨(L1R5) 肩甲骨(L1) 後側頭骨(L1) 口蓋骨(L3R8) 上擬鎖骨(L3R4) 上舌骨(R1) 副蝶形骨3	174
タイ科					1							1			2	1	2	10		下鰓蓋骨(L2) 擬鎖骨(L2) 口蓋骨(L1) 上擬鎖骨(L2) 間鰓蓋骨(L1)	25
カマス科							1	1													2
サバ科			1		1	3		1					1			1					8
カツオ						1	1							1		2		6		擬鎖骨(R1) 肩甲骨(L1) 下鰓蓋骨(L1)	14
サワラ																		6			6
ソウダガツオ属																		1			1
サバ科																			1		1
カレイ科										1											1
マフグ科					1																1
計																					319

